
始まりは胡蝶のように

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりは蝴蝶のよひ

【NZコード】

N1440Y

【作者名】

桝

【あらすじ】

現実世界に不満のある所謂いわゆる今時の少女が、人生の転機を求めて見知らぬ街に冒険しに行つたら、何故か最終的には自分で驚くような世界をまたにかける大恋愛に？

妖怪物で、人間を食べる話も出てくるかと思われますのでご注意を！！

prologue (前書き)

軽いプロローグのはずが何故か暗くなつてしません。

ゆめを、みました

「じとばにできないほど しあわせで
きおくをけしてしまいたくなるほど やさしくな
そして

いまもむねがくるしくなるほど ここにあこつとであつ
そんなゆめを……

「つー、おーつ」

「水鳥ちゃん、先生呼んでるよ?」

つん、と胸中を突かれ聞えた友人の声に、あたしは眺めていた窓の外から視線を教室の黒板へと素早く戻す……

「すみません、つい」

「お前なあ、最近なんか変だぞ? 授業中によそ見なんて、そこで居眠りしてると神谷なら分かるが……」

黒板を背に、教卓の前に立つ担任の古川先生はそう言いながら遅刻・居眠り・サボりの常習犯である神谷君に見事なチョーク投げを

披露し、

「なにか、悩みもあるのか？先生はどんな悩みでも受け入れてやるぞ」

さらにそう言い切ると、無い胸を張り、自信と希望に満ちた瞳をあたしに向ける。

「せんせー、それ受け入れても絶対解決にはなんないと思つ、むしろ相談なら親友の私にでしょ？」

あたしを突いて助けてくれた友人、里見ちゃんが鋭く突っ込みをいれ

「おつと、そりゃそうだ！信頼できる友達を持ってば人生も楽しくなるからな、先生は友情の邪魔はせんぞ」

「せんせー、まじで何歳？」

呆れた声でそう返す里見ちゃん。

あたしは、この高校に入学してからもう一年。笑顔が絶えないそんなこのクラスが大好きで、大好きで、幸せなのに…けれどたまに思うことがある。こんな風に女子高生をしているあたしは実は夢の中にいて、何かの拍子に目が覚めたら、本当のあたしはどうか別のことこにいるのじゃないかって…。

けれど本当は分かつていた、こんなことを想う理由も、その理由といつかは向き合わなきやいけないのだということも。

あの、少女の頃に見た夢と……

* * * * * 三年前 * * * * *

あれは、とても寒い冬の始まりの日。

あたしは、猫のように気まぐれで、鬼のように寂しがりで、人間の三歳児のように好奇心だけは旺盛で、それでいてすぐに迷子になるような、そんな、ただの女の子だった。

その日もあたしは、思いついたらすぐ行動に移したいマイペースっぷりを見事に発揮して、冒険気分のまま、朝早くに家を飛び出した。外に出ると、いつもは沢山の人人が行きかう駅までの道も閑散としていて、ぼうっと立っていたらすぐに息は白く色づき、毛糸の帽

子から飛び出した自慢の福耳は真っ赤に染まって、季節も空氣もあたしが冒険に飛び出す邪魔ばかりした。それでも不思議と気持ちは上向きで、出かけると決めたのは突然目覚めた早朝なのに、防寒対策はばっちりで、今流行のヒートテックを取り入れた今日の服装に抜かりはない。

「はあ……」

雪が、ちらちらと降り始めた。こうしてじっとしていれば、目に見えるすべてはいずれ消毒されたように真っ白になって、あたしもこの道も見えなくなるのだろうか。なんて、あの頃のあたしは、様々なことに視線を向けていたような気がする。今、友人と歩けばたつ数分の駅までの道を行くだけなのに、沢山のモノに興味を惹かれて、その一つひとつに時間を取られて、結局電車に乗れたのは、家を出てから半日も過ぎてからだった。

がたごと、がたごと、と電車に揺られ、窓から見える知らない街を眺める。

「あつ、海」

何駅も、何駅も過ぎてたどり着いたのは、潮の匂いのする風が吹く、小さな町でした。海に向かい歩きだせば、降り積もる新雪がしやり、しゃりと音をさせ足元で踏み固められていき、振り返れば……

「真っ白」

しつかりと歩いてきたはずが、振り続ける雪には勝てるはずもなく、あたしの残してきた足跡はどこにも見えない。まるで、短いながらも必死に生きてきたはずが、いまだに自分の足元すらおぼつかない、あたしの人生のようだと、その時あたしは世界を恨んで

いた。

父は公務員、母は専業主婦、兄は子供の頃から頭が良くて人気者、弟はまだ小さいせに老人のような貫録を見せ、しかし見た目は幼児と言うギャップからか家族からは可愛がられ、同年代の子供には慕われる。

「……あたしは」

あたしは、マイペースで気まぐれで、兄とは年子のせいであまり騒がれることも無く、愛想もないせいか、実の祖母にも可愛くないとそっぽを向かれる始末。成長するにつれ人との違いは顕著に見られるようになり、次第に周りの大人たちも個性的ねえ、とは言つても、褒め言葉は口にしなくなつた。

自分でも幼いながらに気づいていなかつたわけじゃない。その他大勢が興味を示すような流行には興味もなかつたし、大抵の女の子の好きなファッショント話を振られても、何が楽しいのかあたしにはさっぱり理解できない。何度か母のアドバイスを元に所謂それ系の雑誌も購入しては見たが、あたしには合わなかつたと言える。そんな物の為に使う時間があるなら、あたしは探検に出かけたり、良くな行く古めかしい本屋のリクエストボックスにもつと面白い小説を充実させるように、と長々^{したたか}認めた紙を投書したいし、何時だつたか見つけたのどかな土手に横になりぼうっと空を眺めたい。

そう、何度も何度も家族からはそのマイペースなところや人とズレた感性を治せと注意はされたし、親族との集まりでは恥をかいと叱られたりもしたけれど、あたしだって努力はした。人と会うたびに、変わっている、個性的、他にも色々と言われたがそんなことを長い人生の中で人に出会うたび、言葉を交わすたび、口にされたくはないし……正直もう分かつたから放つておいて!と何度も叫びそうになつたか分からない。

拳句の果てに、あたしと言う存在は学校と言う場所では特に嫌な

意味で目立ち、一見平穏に見えた田舎の学校生活も、突然ぽんつと音を立てて浮き彫りになつた問題のせいでのマンモス校に最悪の空気を蔓延させた。何処から流出した情報かは分からぬけど、その問題は、あたしが長年ひた隠しにしてきたたつた一つの秘密だつた。

その問題……ドロドロのイジメが、大人たちの知らないところで、いつたい何年続いていたかつて？そんなの、思い出したくもないくらい、ずっと前から。何時だつてそうだつた……その個性のせいであたしはいつも笑われたり、叱られたり、親にも、兄妹にも、友達にも、奇異の目で見られ続けて。だんだんと、あたしは学校に行かなくなり、もともと亭主関白過ぎた両親は不仲に、優等生の兄は家中でどこで手に入れたのか分からぬ木刀を振り回し、弟は様々なことを諦めたような瞳であたしを見つめた。

……ああ、もう、疲れた。

大きく息を吸つて、吐いて、泣いて、叫んで、長年恐れていたたつた一つの秘密の発覚は、我が家に大きな亀裂を走らせ、そうしてやつとあたしは気が付いたの。自分の家について、自分の家族と美味しい食事を食べて、暖かいベットの中で眠つても、もう優しい夢は見れないし、例え恐ろしい夢で真夜中に目を覚ましても、たつた一言、もう大丈夫だと言って頭を撫でてくれる柔らかな掌も、今のあたしには期待できない。

からっぽだ、と思った。もう疲れ果てて、憎悪さえこの心に留めてはおけないくらい氣力も体力も残つてはいなかつた。

「「」」^{かえり}が、不帰の森

ちゃんと調べてきた。怪奇現象なんて信じてはいなけれど、それでも、これは賭けだ。

「「」」から、無事に戻れたら、その時は

ちやんとは話さう。今までずっと、我慢していたことを、全部、吐き出してしまおう。

自分は黙つても迷惑をかけるから、あまり物を欲しがつたりしたことはない。だけどね、本当は欲しいものがあるの。お母さんは買い物に出かけると何時だつてお兄ちゃんに先に尋ねる、今日は何が食べたい？何か欲しいものは？大抵はそれで決まつてしまつてあたしの出る幕はない。弟とは歳が少し離れているため、どちらが可愛いかななど比較もされない。

だけどそれも今日で終わり。あたしは変わるの、どう変わるかはまだまだ計画中だけど、でもこれはその第一歩。

「だいじょうぶ、あたしは、かえつてくる」

いつかのテレビで偉い学者さんが一生懸命説明してた。この森はとっても神聖な森で、許可なく侵入した人は森の主の怒りを買ってどこか遠くに飛ばされるって。一度と戻らない者もいれば、数日後や数年後と時期はバラバラでもそのうちひょっこり帰つて来る人もいるらしくて、見事戻ったものは幸運を連れて来るって言い伝えもあるらしい。

「だいじょうぶ」

もう一度そう呟いたあたしは、自分を奮い立たせ、何処を見ても真っ白な雪深い森を睨みつけながら、力強く足を踏み出した。

第一話（前書き）

このお話は今のところ少し暗いですが、最終的には明るくハッピープな恋愛物になる予定です。

第一話

森に入り歩き続けて暫く経つた頃、あたしの世界は反転した。

「……きもちわるい」

たった一瞬で全てが変わってしまった。息苦しくて深呼吸をした
いのに、息を吸う行為すら億劫で、ふらふらと足元も覚束ない……。
先ほどまでは美しく見えた真っ白な雪も、今はただ冷たくて、どう
しようもない恐怖があたしを取り囮み、気を抜けばすぐにでも取り
込まれそうで……がくがくと震える足に必死で力を込める。
その時、俯くあたしの視界に人間の足が。

「ここなんどころで何をしている。人間の小娘が何の用で儂の住処
に参つたのだ」

現代の人間にしては古風な話し言葉。そして、あたしは思った：
…コレは、人じやない。

視界に入ったままの足元は、裸足。そして、その足の持ち主が身
に着けているのは着物だ。真っ赤な着物の裾がひらひらと、風もな
いのに揺れている。

「……のう小娘、この地は古来より儂の住処よ。悪いことは言わ
ぬ、早々に立ち去れ」

穏やかな、それでいて冷たい声があたしを諭す。
さと

「この地へ踏み入った者は、何時もなら例外なく返さぬ……儂が、

遠い昔にそう決めた。この地へ踏み入り、一時を過ごすとなあ、もう戻れぬのよ。そういう風に、呪いがかかつておる。だがお前は、見たところ今この地へ「迷い込んだ」のだろう? ならば、儂が帰してやるう。儂は今、とても気分が良いのだ

ふふ、と男のか女なのか、それとも性別などは元々存在しないのか。奇妙な音の笑い声が耳にとどき、あたしは全身の産毛が逆立つのを肌で感じ、心底ぞつとした。

「何時もなら、放つて置けば腹を空かした眷属たちの大粒な糧になるのだが……うむ。小娘、お前は若いな」

あたしが黙つたままなのを良いこと、その生き物は話し続け

「うむ、小娘は若いか。……気が変わった、お前を連れて帰ろう」「なんだ? ! 何が起きたの? うむつむ言つて、それで何が分かったわけ? びつして、

「小娘、お前は煮て食べられるのと、焼いて食べられるのと、そのまま踊り食いされるのでは、どれが望みか」

……どうして食われることが前提で話が進んで行くのでしょうか?
? ! !

「……」

あたしは勇氣を振り絞り、ぱつと顔を上げた。一言で良い、食べないで下さいと、そう言いたくて……でもそれは到底無理な話だつた。なぜなら、その生き物は、その生き物は……

「……水色の、髪？」

それは水色の髪をした物凄い美形の男だった。
信じられない！！こんな生き物がこの世に存在しているなんて！
一度肝を抜かれるくらい美しい男。これは、べつな意味で人間じや
ないだろ？！と、あたしは半ば心を盗まれ、茫然としたまま、どこ
かわからない彼の住処へ連れ去らわれるのだった。

第一話

しんみつと始まつたはずのあたしの冒険は、現在とても…おかしな展開に陥つております…！

「う、小娘よ。お前は若く、瑞々しく、生きも良こ。せつと、とても美味しいだらうなあ」

「……どうして、あの森は神聖などいだつて」

「は例の男の住処らしい」。

日本の、と言つよりは中国とかアジアの建築物みたいな重厚感ある平屋の家が竹林に囲まれた森の奥深くに経つているつて……おかしくない？…！

「ふふつ……」はお前の言つておる「あの森」ではないのでな。はじめて聞いたである「へ」は、農の住処であると

高そうな和室みたいな部屋で男は胡坐をかき、投げ出されたままのあたしを眺めて酒を飲む。

「もうすぐ臭いを嗅ぎつけて眷属共も来よ」

「冗談じやない…！…食われてたまるかつーあたしは家に帰つて、それでつ

「ほひ、小娘……血縁の者どもひと手へこつておらぬのか？」

ふに、口にされたその言葉は、あたしの心を丸裸にして、傷つ

けた。

「ふふふつ、人とはなんと面白い生き物か。我らはそもそも血の繫がりをもたん上に興味すらないが、お前ら人はその繫がりを重要視しておる。所詮生物は弱肉強食であろう?弱いものは死に、強いものは生きる。繫がりなどと言つものが、どれほどの役に立つのか」

あたしは、こんな何も知らないモノにそんなことを言われる筋合いなんてつ

「何も知らぬ?ふふつなあんにも……知らぬと思つたか?先ほどからお前の言葉が漏れ聞こえて、少々耳障りな程だと言つて」

……つこいつ、あたしの心の声を聞いてる?

「ううう、とは……儂にも名はあるのだがのう?そうだそうだ、小娘、お前の名を聞こうか?」

ふざけてるのか、この男!あたしを食べる癖に、名を聞こうつて?馬鹿にしてつ

「おやおや、怒つたのかい?それは悪いことを言つた」

あたしは投げ出されたまま、半ば畳の上に倒れ込んだ状態でいた身体を起こし、男に掴みかかった。

「つ悪かつた?!あんたは!人の傷口を平気な顔して抉つておいてつ!…煮るだの焼くだの踊り食いだのつ!…拳句の果てに今から食つ食糧に名前は?つて!…ふざけんな」

男の優美な着物の襟を驚掴み、奴の飲んでいた酒も足蹴にして、鼻が擦れるかと思うほど近い距離で、あたしは泣きながら叫んだ。

「ああたしは幸せになりたくてつ幸せになるために……そのためにきっかけがほしくて……だつて、それぐらしだまきや一步踏み出すのつて……凄く物凄く怖いんだからつ」

「ふうむ、幸せ……」

胸蔵を掴まれて「い」と言つたのに、男は微動だにせず……と言つしまつたく意に介さずに何かを考えているようだ。

「小娘、幸せになりたいか？」

「……」

人が泣いてるのにこの男つ……しかも、幸せになりたいかつて？
！…さつきからそう言つてんじゃんか！！

正直、この男はマイペース過ぎるとあたしは思つ。あたしはなかなか止まらない涙を必死に服の袖で拭いながら、こんなやつに食べられる自分の不幸を嘆いていた。……その時、このおかしな空間に侵入者が現れた！！今度は何？！

「すいしゃくわまあ……おかれりなさいませえ……」

しつかり締められていたはずの襖の端から、するつ、と小さな小さな蛇が……へつ？蛇つ？！

「ふふふ、しちふ。戻ったか」

「はいー！七歩蛇は只今戻りました」「まあ…あこしゃくわあ～」の小娘は、何故すいしゃくたまのおそばにあるのですか？保存食と並ぶもので「ありますかあ？」

十一センチくらいしかない蛇のくせに、何故か朱色の小さな着物を着ていて…人話を話していらっしゃる？

「ふむ、この小娘は…お前たちの食糧」と思つて持つてきたのだが、「

「わあーみんなしつぽをくねらせて喜びます♪…」

すでに蛇はじつぽをひねりさせて、いかがを見てこる。

「ふふ、しかし…氣が変わつてな。この娘、儂の伴侶とする

…はあ？

「なななななんつなんですか？…すこしゃくたまの…はははははんりょ」

ほと、そんな音と共に蛇は白皿をむき倒れてしまつた…。いや、氣持ちは分かるよ～あたしだって出来ぬなら氣絶したいわつ…！

「なんでツビツビしてなにがどつなつてそんな流れになつたの？！」

あたしは思わず掴んだままだつた着物の襟を手放し、その代わりと言つてはなんだが思わず男の髪を引っ張つていた。

「うむ、食べるのはお前に飽きてからでも良こと思つのだな。儂

せお前を幸せにする」と興味がある」

じゃあ飽きたら食べるのか？！あたしさの野どじやなくて…。
！自分の家族と幸せになりたいんだってのに…！
もつたすけ…！

第三話（前書き）

何だか短くてすみません！！！

あのあと何が起きたかって？……それは

「のう、そのように膨れ面をせずこちらへ腰を落ち着けよ」

引っ掴んでいた水色の髪は、ムカつくほど丈夫で一本も抜け落ちたり千切れたりせず、今も目の前のふざけた男の頭部にふさふさ揺れながら健在している。

「あのね、例えあんたが何者でも、これだけは言わせてもらひつわ

あたしは話しが通じないこの美形の男から距離を取り、現在は部屋の端と端に分かれて座っている状態で叫んでやった。

「あたしはつ絶対に！…ぜえつたに森を抜けて家に帰るのつ！」

大体なんで知らない男に知らない家まで運ばれて、良く分かんな
いけど喋る小さい蛇に結婚宣言しなきやいけないわけ？！おかしい
でしょ？……おかしいよね？

「ふふ、そう言わずに大人しく伴侶となれば、お前の望む幸せと
やらが手に入るのだぞ？む、喋る蛇？……そうじやつたな、しちふ
を忘れておつた」

あたしの心の声をまた性懲りも聞いたらしく、そう言った男は不
意に、気絶して倒れたままの小さな蛇を手に取り……食つた？！

「ひつ……いいいいい！今！食べたそれ！！あなたの知り合い
だつたんじやないの？！」

ペロリ、と紅く長い舌で唇を舐めた男は言った

「ふふ、儂らの世は弱肉強食であるから。使えぬものはただ殺
すのではなく、食つて自らの糧とするのだ。……ふむ、伴侶となる
女子が何も知らぬと言つのもさか問題が生じそうだ。説明し
ておくとしよう」

妖艶に笑い、悪びれもなく俺様発言をかまし、あたしの叫びを完
全無視の伴侶呼び！～あ～本当にもう！蛇を生で食つたことに引け
ばいいのか、あたしが伴侶になることをもう決めているらじここと
に怒ればいいのか！～どつちっ！

「儂らを人間が呼ぶとき、皆名はそれぞれだが大抵はこうだ……
「妖怪」そして儂の名は水糀すいしゃくと言つ。好きに呼べ」

はあ？！妖怪！？……まあ何となく納得はできるな。でも名前を
呼ぶことは絶対になー！～

第三話（後書き）

一応、妖怪の名前とかは調べつつ書いていますが表現が間違つて
いたら、「一報ください。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1440y/>

始まりは胡蝶のように

2011年11月17日17時35分発行